

柿沼 唯 (作曲家) *Yui Kakinuma*

## H. ベルリオーズ (1803-1869) 序曲「ローマの謝肉祭」Op. 9

文学者のV.ユゴー、画家のE.ドラクロワとともに「ロマン主義芸術の三位一体」とも呼ばれたベルリオーズは、生来の多感な性格と文学への激しい愛着から、当時としては型破りなドラマティックで大がかりな音楽作品を次々と生み出したが、オペラは3曲しか完成させていない。その一つ<ベンヴェヌート・チェルリーニ>は1838年、ベルリオーズ35歳の時にパリ・オペラ座で初演されたが、散々な不評に終わったという。その後ベルリオーズはこのオペラを何度も改訂したが、その過程で生み出されたのが、今日ベルリオーズの序曲中もっとも演奏される機会の多い、この<ローマの謝肉祭>である。ベルリオーズはこの序曲を、オペラのメロディを使って独立した演奏会用序曲として仕立て直した。用いられているのは、オペラの舞台である「ローマの謝肉祭」の主題とアリアのメロディである。

曲は、激情的な開始部に続いて「愛の二重唱」のメロディとイングリッシュホルンによる印象的な主題が登場し、やがて謝肉祭の情景へと転じる。アリアのメロディを随所にちりばめながら、オーケストラは次第に華やかさを増し、最後はイタリアの舞曲サルタレッコの熱狂的なクライマックスへと達する。

チェン・チーガン (1951- )

## ヴァイオリン協奏曲「苦悩の中の歓喜」

チェン・チーガン(陳其鋼)は上海の画家の家に生まれた。北京中央音楽院を経て、パリでオリヴィエ・メシアンに師事したフランス在住の作曲家。現在世界的に活躍するその作風は、ヨーロッパのオーソドックスな音楽語法に中国伝統音楽のテイストを融合させ、多くの人に語りかける抒情性をもつ。<ヴァイオリン協奏曲「苦悩の中の歓喜」>は、2016~17年に北京音楽祭他の共同委嘱により作曲された作品で、2017年10月にマキシム・ヴェンゲーロフのヴァイオリン独奏とチャイナ・フィルハーモニー管弦楽団により初演された。

曲は単一楽章形式で、唐代の詩人、王維(699-789)の「元二の安西に使いを送る」の詩による中国古謡「陽関三疊」をもとに、ヴァイオリンの技巧を随所に散りばめた自由な変奏が展開する。作曲者は作品に寄せて次のように述べている。

「人生の苦悩を味わったことのない者には、苦悩の後に訪れる歓喜の享受の仕方が解らない

ばかりか、歓喜は多くの場合、痛みを耐え抜いてからしか訪れないということが理解できない。人生の中で、私達が獲得した断片的なものは、すべて置き去りにされ、私達の元に残るのは無に過ぎない。それでもやはり、作曲家は、苦悩を耐え抜いた後に獲得した歓喜と幸福な思い出を保とうとすると同時に、聴衆と自身の間の内面の深い場所に根づいた愛を、分かち合おうとする。」

L.v. ベートーヴェン (1770-1827)

## 交響曲第5番 ハ短調 Op. 67 「運命」

<交響曲第5番>は、1804年から4年の歳月をかけて作曲され、1808年12月に第6番「田園」とともにウィーンのアン・デア・ウィーン劇場で開かれたベートーヴェンの演奏会で初演された。言うまでもなく、ベートーヴェンの代名詞といえるほどに広く愛好されている名作である。特にわが国では、「運命」のタイトルで親しまれているが、このタイトル、実は日本以外の国で使われることは少ない。タイトルの由来は、第1楽章冒頭の4つの音符についてベートーヴェンが、弟子のシントラーに「運命はこのように扉をたたく」と語ったという有名な逸話による。耳の病を強靱な生への意志によって克服した作曲家の不屈の魂。その厳しきや力強さがみながるようなイメージを、この曲に抱く人は多いだろう。しかし純粋に音楽的に見ても、この作品は円熟期のベートーヴェンならではの数々の音楽的特質を備えた傑作である。何より画期的なのは、第1楽章で4音の動機を徹底的に展開する音楽作りに見られるすぐれた造形性。そしてさらに、様々な大胆な試みを取り入れることによって、ベートーヴェンは「交響曲」というジャンルに、形式的な発想にとどまらない、聴き手の心にダイレクトに訴える音楽のスタイルをうち立てたのだった。この傑作には、そうした新しい音楽的要素が、見事に凝縮された形で結晶しているのである。

**第1楽章** アレグロ・コン・ブリオは、ソナタ形式による緊迫感みなぎる楽章。

**第2楽章** アンダンテ・コン・モートは、変奏曲形式による安らぎの音楽。

**第3楽章** アレグロは、異様な雰囲気をもつスケルツォ。個性的な音楽作りが見られ、次の楽章への橋渡しの部分での劇的効果は見事だ。

**第4楽章** アレグロは、全合奏による雄渾な凱歌にはじまり、豪壮華麗で力感あふれる音楽が展開する。